

書評——

戦時期日本のモダン度—

斎藤美奈子『戦下のレシピ』岩波アクティブ新書、2002年

有馬 学『帝国の昭和』講談社「日本の歴史」23、2002年

松浦 正孝『財界の政治経済史』東京大学出版会、2002年

都 築 勉

三冊の新刊書を用いて、三題断を試みる。まずは斎藤美奈子の『戦下のレシピ』。この人の着眼はいつも鋭いが、今度は太平洋戦争下に食糧が欠乏する中で、『主婦之友』や『婦人倶楽部』がどんな料理のレシピを載せていたかを披露した。佐藤卓己に言わせれば、そもそも婦人雑誌は元祖「国民大衆雑誌」である。それは選挙権のない当時の女性の「国民」への編入を促す（『『キング』の時代』岩波書店、2002年）。「お井に御飯を入れ、その上へこの卯の花をたっぷり盛り、揉み海苔を振りかけて頂きます」。これは「節米」のためのおからの食べ方。「たんぼの若葉をさっと熱湯に通して水に晒しておき...」。これは野草の食べ方の一例。「仕掛けた御飯に入れてさっぱりと塩味に炊く」。これは茶がらの話。極め付きは「主婦自身の手で道端の土を掘ってかまどを作り、有合せの器をかけて温い戦場食の煙をあげましょう」。

プレモダンどころか原始時代を思わせる窮迫した事情とそれを告げる上品な文体とのこのギャップ。この時点で日本の文明は果たしてどのような段階に達していたのかと考え込む。そこへ講談社の「日本の歴史」第23巻『帝国の昭和』が出た。著者の有馬学は中央公論新社の「日本の近代」シリーズではこれに先行する時代を描き（『「国際化」の中の帝国日本』1999年）、自らの観点を「政治社会史」と規定した。これは同時代の人々の思考方法の枠組みに注目するものだが、政治や経済や文化をなるべく相互関連的に見る見方でもある。前著では最後に第一次大戦期の「社会の発見」が指摘された。それに続く今回は、大まかに言えばその「社会」が再び「国家」に吸収される時代の歴史である。

有馬は一面で昭和戦前期の日本のモダンぶり

を強調する。技術革新がもたらした兵器生産がその恩恵を受けたのはもちろんだが、他にもたとえば写真や映画の発達がある。そして関東大震災から復興した帝都東京の姿。しかしこの時代は相次ぐ恐慌と農村の窮乏で社会不安が増大した時代でもある。有馬によれば、講座派マルクス主義が初めて日本の近代のゆがみや特殊性という日本像を同時代の人々に提供した。それはマルクス主義陣営の内部にとどまらず、今日に至るまで日本の多くの知識人に影響を与えて来た。この特殊性論の旨点は、それを裏返すと極めてナショナリスティックで優越的な日本論になることである。絶対値が同じまま正負を反対にしたような形の転向が見られたことも周知の事実属する。

昭和戦前期のプレモダンぶりは天皇制を挙げるまでもなく、政党政治のあり方に表れていた。普通選挙は導入されても、議院内閣制ではないから、政権交代のルールは存在しない。この本のすぐれたところは、いわゆる「憲政常道」の欺瞞を暴いている点だ。政府与党が行き詰まったら野党第一党に政権を渡す。最後の元老西園寺の聡明さがそれを保証する。しかし選挙を経ずに野党に政権を渡すというのは、考えてみれば奇妙な話だ。それに何を以て行き詰まりとみなすのか。極端な場合、首相が殺害されたらどうするか。原や浜口の時は与党の後継者が組閣したが、犬養の時は挙国一致内閣が作られた。その時点で「憲政常道」は終焉した。しかしそれには別の要因もあって、これが重要なのだが、実は1930年代に入って政治を取り巻く環境は変化しつつあった。有馬が言うように、「経済政策が政治の中心に浮上してきた」ことだ。「政治の経済化」である。政党はこの事態に十

分な対応を示せず、やがて国策を論ずる専門的なテクノクラート知識人が登場して来る。いわゆる革新官僚である。左翼の社会大衆党の中にもその主張に共鳴する者が現れる。そこでどうしてもこの時期の政治と経済の関係を細かく見る必要がある。

松浦正孝の『財界の政治経済史』は最近の政治学の政策ネットワーク論に近い立場から戦前の財界の政治的影響力を分析した本である。著者は修士論文（それはこの本に含まれる）で高橋是清を、博士論文（『日中戦争期における経済と政治』東京大学出版会、1995年）で池田成彬を論じた研究者で、経済史でなく政治史畑の人だが、そんな区別はいつでもよかろう。松浦が「財界」と言うのは経済界の中核のことで、財閥とイコールではない。実体と言うより人的ネットワークであり、他者に受け取られたネットワークのイメージなのだが、方法論はこの本の主題ではない。史料を駆使した綿密な実証が命だ。

松浦は、斎藤、岡田両内閣期の高橋蔵相、第一次近衛内閣期の池田蔵相兼商工相に注目する。高橋は財界人と言うより政党人（政友会）だが、この頃はもはや政党を超越した「財政政治家」であり、財界の信頼を得たのみならず、挙国一致内閣の政治的統合者として各方面の期待を集めた。先の有馬も松浦も紹介していることだが、憲法学者の美濃部達吉のような人が、政治と経済の統合のために議会や内閣の外に一元的で強力なリーダーシップ（「円卓巨頭会議」）を求めようとした時代だったのである。高橋路線は「修正資本主義」に他ならないが、官僚主導でなく財界主導のアプローチで、それに対しては、軽工業に基盤を置く武藤山治のような古典的なリベラリストと、国家の強力な指導による重化学工業化をめざす軍部や革新官僚の左右両翼からの批判が浴びせられた。前者は斎藤内閣を倒した「帝人事件」の捏造につながり、後者は軍費増強と中国侵略に結び付く。興味深いのは、二・二六事件で高橋らを殺害した陸軍の皇道派は、統制派との対立から、この図式ではむ

しろリベラリストの側に位置することである。

池田は高橋と異なり、三井出身の生粋の財界人だが、官僚による統制が進む時代にあっては、逆にその「民間性」が政治的資源になった（前掲松浦『日中戦争期における経済と政治』も参照）。松浦が言うには、池田路線とは要するに「大銀行主導の大企業向けの産業合理化」だった。しかしそれは国際通商主義や英米との協調を不可欠とするもので、「東亜新秩序」や「アジア・モンロー主義」とは相容れないものだった。皮肉にも池田路線は、司馬遼太郎が言う「雑貨屋の帝国主義」（『この国のかたち』）をして、一時にせよ英米に挑戦する体力を付けさせたことになる。

読むうちに、だんだん事態は今日のものに重なって見えて来る。さてそれでは戦時期の日本においてモダンなものの運命はいかにあったのだろうか。当時にあっただけで未熟な「ブルジョワ・デモクラシー」（議会政治もしくは政党政治）と「ブルジョワ・リベラリズム」（市場経済もしくは自由競争）は、戦争を背景にした左右両翼からの早熟なポストモダンの攻撃に直面した。あえて古い用語を使ったが、「ブルジョワ」を「市民」と翻訳すれば、今の我々の前にあるのも決してこれと無縁の問題ではない。「市民的民主主義」や「市民的自由主義」にとって内在的自己改革の道はかつて今も存在しないのだろうか。否、それらはあくまでも本来の姿にとどまることによって、ついに克服されなければならないのか。繰り返して言えば、過去の問題は同時に現在の問題である。政治学専攻の者が経済学の紀要に書く機会を得たから言うわけではないが、検討の対象は政治、経済、社会の多岐にわたるので、社会諸科学を挙げての相互に越境的な研究が必要である。